

二〇二一年度（令和三年度）

福岡女子大学第六十九回卒業証書・学位記
及び大学院第二十八回学位記授与式 式辞

本日ここに、ご来賓各位のご臨席を賜り、第69回卒業式と第28回大学院修了式を迎えることができました。255名の学部卒業生、12名の大学院修了生、そして大学から得られる最高の学位・博士を取得される2名の皆さま、まことにおめでとうございませす。お一人お一人に、その努力に負けないだけの、お祝いを申し上げます。また、絶えることなくご支援をされたご家族の皆さまにも、感謝を捧げ、このおめでたい日とともに喜びたいと思います。式の前には、九州大学フィルハーモニー・オーケストラの皆さんに、学位記授与式を盛り上げる演奏をしていただきました。有難うございました。

コロナ禍のために、昨年度に続き今年もオンラインと対面による、分散型の式典となりました。人生の節目をことほぐ儀式を、一堂が会して執り

行えないことは、まことに残念なことであります。

国際寮での共同生活に始まった2年間の大学生活の後、益々充実したキャンパスライフが送れるとの期待が膨らむ矢先に、感染症が世界に広がり、すべてに自粛が求められることになりました。当然あってしかるべきものが突然になくなり、不自由な中で、大学生活を強いられることになりました。談笑に相槌を打ってくれる相手もなく、サークル活動も中止になり、多くの授業を自宅から画面越しに受けることになりました。この怒りをどこにぶつければよいのか、持てるエネルギーを、どこでどのように燃やせばよいのか、やるせない気持ちで過ごされたことと思います。先日の新聞に、「悔しさと怒りと絶望を。ポケットに詰め、我慢とマスクとパソコンだらけの思い出を両手に抱えて歩き出す」との投書がありました。ここに、皆さんの声が聞こえてきます。

それでも私たち教職員と学生の皆さんは、制限ある環境の中で、本学の教育理念の実現を怠ることなく、どのような教育活動、交流活動ができる

かを懸命に模索し、知恵を持ち寄りながら、この2年間、学びと交流活動を行ってきたと信じます。福岡県は言うまでもなく、後援会や同窓会からも様々な支援の手を差し伸べられました。今や卒業と修了のゴールに至って、お互いに感謝を交換しあう、心の余裕を持ちたいと思います。

大学を巣立つにあたり、もう一度本学の特色と際立ちを再確認していただきたいと思います。本学は、一つに、国際交流、多文化共生に力を入れる大学であり、二つに文系と理系の垣根を超えた学びを推奨する大学であります。他にはない、そのための仕掛けがいくつもありました。大学が誕生したときの本来の姿である、文化背景や出身地域そして国籍が異なる仲間と共に暮らし、学ぶことを可能にする共住の場、「国際学友寮などで」この生活がここにありました。程よい孤独と多様性に身を置き自己を顧みる、或いは調整をする、貴重な機会を得たことでしょう。多様な体験学習もありました。言葉こそ、人を繋ぎ、深く考え、遠くを見通し、そして社会に変革を起こす、大切な

武器であるとの考えから、福女大ほど言語教育に力を入れる大学は他にないでしょう。学部には3学科が、そしてその上に大学院がありました。学科とコースの設定には、折々の社会の求めに呼応して変容しながらも、百年に及ぶ長い歴史が潜んでいます。この学科間、いわゆる文と理の壁も低く、例えば副専攻制度により、自由に超えていくことができました。一言でいえば、様々なくびきから我々を開放する(liberate)リベラル・アーツ、或いはグローバル教養と専門知を身につける場が福女大でした。今、盛んに言われている「総合的な知」です。当たり前前に思えた学修の舞台と環境は、実は、本学に固有のものなのです。我々教職員はそれを誇りにしています。難しい入学試験をくぐり抜け、学部で4年間、大学院では更に2年或いは5年間の、ここにしかない学修を終えた皆さんにとって、これから社会に乗り出すうえで、FWU(福女大)は大きな自信と誇りになるはずです。大きな心の支えになるはずです。それを信じています。

世の中は、嘘と真実の境界があいまいになり、コロナ禍のなかで情報技術の導入が進み、バーチャルとリアルの境も鮮明でなくなりました。私個人の関心でいえば、16世紀の半ば、近代の西洋で起きた「起こり得るか、起こり得ないか」はたまた「あり得るか、あり得ないか」、つまり因果律で世界を見始めた文化現象を思い起こします。それ以前の中世では、虚実ないまぜの世界がありました。例えば、生きている人が同時に亡くなっている、そんな世界観です。村上春樹の『パラレル・ワールド』に似ています。古の人々が楽しんだ物語は、近代になると、起こりえない展開だ、嘘の話だ、と批判され、その後長い間、多くの作品が非合理的との理由で読み継がれなくなりました。このような文化状況のなかで、嘘っぽい箇所は削除すべきという方針を提案された、ある一人の編集者は、次のようなことを序文に書いて、求められた編集を一切施すことなく中世の古い作品を出版しました。

「真実と虚実とが混じっているからこそ却って、鋭い知性と鑑賞力を持つ読者諸兄ならば、その

「 眞実の話をもより良く理解できる。」

これは、1630年頃のイングラントの話ですが、ロシアとウクライナとの情報合戦を引くまでもなく、今、我々はこのような虚実が併存し、せめぎ合う世界に住んでいるようです。福女大は、批判的論理思考とともに感性を大事にし、深く考察するという教育方針を立てています。いわば、この編集者が求める「鋭い知性と判断力、そして鑑賞力」です。それを学んだ皆さんには、ファクト (fact) とフォールス (false) を自身で判断し、区別だて、予測が難しいといわれるこれからの社会を、しなやかに生き抜いていただきたいと思います。

ところで私は、折々に、福女大をアカデミック職能集団のギルドであると語ってきました。ギルドのメンバーは、仲間と子弟の絆を大事にし、身に付けた技とリーダーシップを社会で発揮する義務を持ちます。本学には、筑紫海会（つくしみかい）という同窓会があり、実社会の行く先々で諸先輩であるギルド仲間が待ち受けてくれます。必要な時に仲間を頼り、同窓の結びつきを強くしな

がら、培った力を発揮していただきたいと思います。活躍の時や場所は、人さまざまでしょう。福女大のリーダー像は、地位や権限によらないリーダーシップでした。それぞれの持ち場で、率先垂範するリーダーシップです。家庭で、地域のコミニティで、産業界で、政治や経済、外交、学問の場で、或いは世界のどこかから、我々福女大（FWU）の名が聞こえてくることを強く願っています。

これを以って、はなむけの言葉とさせていただきます。

二〇二二年三月十七日

公立大学法人福岡女子大学

理事長・学長 向井 剛